

## 大倉写真部創立の前後

昭和 11 年卒 原 勲夫

私がいま住んでいる調布に近い国立に。東京商科大学（今の一ツ橋大）が都心から引越してきたので、通学に便利だというわけで入試に挑戦したのか昭和 7 年のことでした。そのころは、試験科目に毛筆の習字というのかあって。試験のとき私はあがっていたためか、墨壺を倒して、墨汁で用紙をだめにしてしまったので、そのまま退席して不合格。次いで急いで大倉高商を受験しました。

大倉の入試試験では、英・数とも不思議なようにヤマが当り、好成績で合格したことを覚えています。通学するようになると、すぐに運動部関係文化関係の諸先輩から入部の勧誘がまことに活発でした。私は運動はあまり積極的な方ではなく、好きな写真部と広告研究会に入ることにしました。

写真部は、この年正式に発足したばかりで、初代部長の橋本茂先輩は。学校からの部費の獲得に奔走された甲斐かあって、予算の決定会議で始めて部費 35 円（年額）が支出されることとなりました。部費の中では少い方で下から何番目かだったと思います。

校舎の一角の階段の下に暗室ができ上り、公式に写真部が発足しました。クラブ活動の 1 つである写真展は、銀座の大阪ビルという、そのころとしては大変豪華な建物の一階で開催され、全員の作品が多数展示されたことを覚えています。金持の道楽がこの時代にはカメラ好きという人もおりましたが、人数が少なく、お金持ちの道楽と見られがちでした。というのも、カメラはもとより、フィルムも印画紙も、生活費に比べて大変高価で、シャッター一度押すのも慎重に。ムダ撮りや失敗は許せなかったのです。

クラブ活動を盛んにするためには、部費が足りないというので、部費の足しにするために D. P. スナップ写真撮影を引受けました。そのため勉学は力をぬいて、あまり好きでない課目のときにはサボって夜遅くまで暗室にモグリ込んでいたことも再々でした。

写真部 3 代目の部長に私か就任したとき、何かとお金をつくって、キャビネの暗箱とレンズを購入し本格的に写真屋を始めました。運動部の出張スナップ写真を引受けたり。卒業アルバムの編集などで部費の不足をカバーしました。

私は昭和 11 年、例の日本史を驚かせた 2・26 事件の年の卒業です。あの日には卒業試験があるというので、朝早く真白な雪道を登校しました。赤坂の現場近くは無事通過して学校に到着。クラスの仲間同志、今日はもしかしたら試験は無いかもしれないなどと話し合っておりましたが、予想に違わず今日の卒業試験は、延期と学校が発表したの、みんな歓声を挙げて喜びました。

「行きはよいよい帰りはこわい」という唄の通り、帰路、池から少し行ったところで剣付鉄砲を持って、カーキ色のオーバーに包まれた兵士 3 名から「どこへ行くんだ」と一喝され、もう少しで胸の辺を突き刺すばかりの剣幕、そのあともう一級下の兵士の処に引っ張って行き、今朝の要件を詳しく説明してようやく放免。もしカメラでも持っていたらスパイ扱いにされてしまったのではなからうか。このときだけはヒヤッとしま

した。

就職か決ってもこの頃は景気は悪く。就職難で、卒業生の3分の1ぐらいが就職できればよい方でした。3月に入ったある日、学校の掲示板に「広告に興味ある人を求む」という製薬会社があったので、直ちに応募。即日入社が決定しました。まことに忙しいと言うか、セッカチな会社と見えて卒業はどうしてもよいからすぐ出社せよと気の早い話となり、宣伝部門だったので、その日から新聞の原稿づくり仕事に追い回される小間使いだった。しかし、写真の基礎知識は大いに役立ち自信が持てたのです。

それから以後、私の写真は職業と趣味を兼ねることになりました。また、小型映画もやり始め、8ミリでしたが、フィルムは旧シングルからダブルに代るころでした。これからは8ミリはダブルフィルム時代だ。間違ってシングル用のカメラを買うな。というのがシネ通の注告でした。

予定の枚数もつきましたが、今は、カメラはライカミノルタとハッセルを使用しています。また最近、私の家の近くに「ギャラリー信天」をオープンして写真展を時折開催しています。